

【特色ある学校づくり・環境教育】

夢に向かって 明るく たくましく生きる生徒の育成

守谷市立けやき台中学校

1 はじめに

本校では、夢に向かって明るくたくましく生きる生徒の育成を目指し、確かな学力の育成と、新しい時代に対応した教育の推進を2つの柱として教育活動を進めていくことにした。また、以下の理由から、今年度の研究テーマを「主体的に学習に取り組む態度を育てる指導と評価の在り方—「楽しい」と感じる授業の追究を通してー」に設定した。

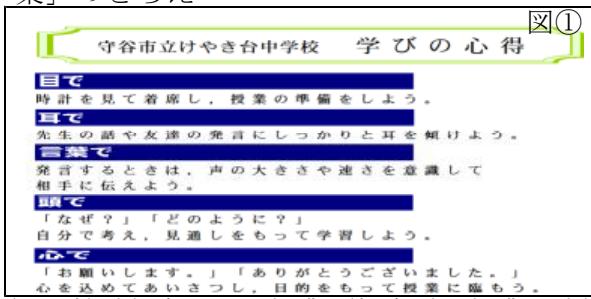
○学力の3要素「基礎的・基本的な知識及び技能」「知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」を生かした授業づくりの必要から

○本校生徒の実態（25年度学校運営改善に関するアンケート結果・「授業が楽しい」（目標80%）→改善を要する（74.0%））から推察される、「授業の内容が分からず」「授業の内容が物足りない」という2つのタイプの生徒への個に応じた指導の充実を図る必要から

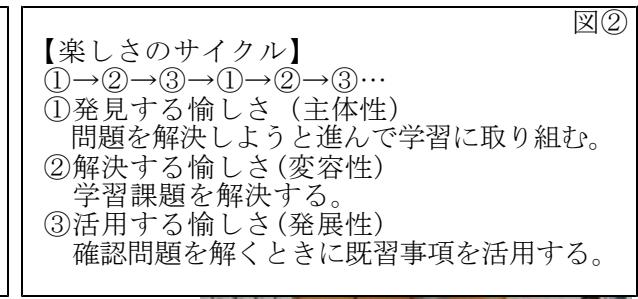
○学力の2極化を解消し、生徒の主体性を高める指導の必要から

2 実践

- (1) 守谷市「学びのプラン」に基づく本校版「学びの心得」（教室掲示・下図①）の作成
(2) 校内研修「研究の基本的な考え方」（下図②），各教科における「『楽しい』と感じる授業」のとらえ



図①



図②

- (3) 一教科部会一公開授業（社会科の授業研究）

「『おもてなし』に負けない日本の文化をアピールするキャッチコピーを考え、発表する方法について考える」という学習内容で、グループでの話し合い活動が活発に行われた。前時にはウェビングマップを効果的に取り入れ、生徒が主体的に学習に取り組めるようにするために、何を、どのような方法で思考・表現させたらよいのかが、綿密に組まれた授業であった。



- (4) 学習相談の実施

夏季休業第一週目と12月第3週を学習相談Weekとして設定し、クラス単位の補充学習と少人数の個別指導（数学）を組み合わせて行った。自習室を併設した。特に計算分野で困難を抱える生徒にきめ細かな指導を行うことができた。

3 成果と課題

検証の視点として、「生徒が『楽しい』と感じる授業（指導と評価の在り方）を追究することで、生徒が主体的に授業に取り組む態度を育てることができたか。」を、学校運営改善に関するアンケート結果や授業公開、学習相談後の振り返りなどから検証し、次のような成果と課題が明らかになった。

(1) 成果

- ・「授業の内容を理解している」と答えた生徒が8割を超えた。
- ・校内研修、公開授業、教科部会、研修便り等を通して、各教科において楽しい授業を目指した指導計画や授業展開を考え、実践することができた。
- ・学習相談では、1日目より2日目、3日目と段々理解力が付いてきた。苦手な箇所を個別に見い出し、全職員で指導に当たることができた。

(2) 課題

- ・「授業が楽しい」と答えた生徒は7割にとどまった。
- ・楽しいと感じる授業づくりのための手立てを確立するまでに至らなかった。言語活動の充実を土台として、各教科部会及び教科ブロックを組んで教科間の連携した指導を図りたい。
- ・関心・意欲・態度の評価について、補助簿の充実が重要である。授業での、生徒の学びの見と

りを言葉で記録する。また、育てたい生徒の姿、評価の方法・時期を明確にして、指導計画を立て直していく必要がある。

- ・授業時間内だけでは個への対応に限界がある。学習が停滞した生徒に、いかにやる気をもたせ、いかに基礎・基本の定着を図つたらよいか、手立てを考えていく必要がある。

環境教育の実践

守谷市立けやき台中学校

1 はじめに

本校の環境教育では、毎年、環境問題についての意識を高めることが重要であると考え、下記の3つの視点を掲げて実践してきた。

『環境教育3つの視点』

○さまざまな環境問題の現状を知り、環境問題への関心を高める。

○自然環境のしくみについて理解を深め、地球環境を大切にしていこうとする意識を高める。

○自分たちにもできる環境保全策を考え、実践していこうとする態度を育てる。

本年度も、各教科での実践を中心に、生徒会活動等の特別活動でも環境問題に取り組んだ。

2 実践

(1) 各教科における取組から

【社会】

2年生「世界から見た日本のすがた」では、過密の問題として大気汚染やゴミ問題があることを理解した。

3年では「国際問題とわたしたち」では、温暖化を中心とした地球環境問題を知り、自分たちにできる温暖化対策などについて考えた。

【理科】

3年「たいせつなエネルギー資源」では、わたしたちの暮らしの中で、いかに多くのエネルギーが必要か、枯渇エネルギーの限界が近いこと、エネルギーを無駄なく使う重要性、再生可能エネルギーの利用などを学習した。

【技術・家庭】

3年では、ミニトマトや、土を使用しないハーブを水耕栽培した。1年では、持続可能な社会のための技術を学び、リデュース、リユース、リサイクルの3Rを推進する大切さを理解した。また、「使う」だけでなく「捨てる」ことを考えて材料を選ぶ必要性を学んだ。

(2) 特別活動における取組から

生徒会では、秋に学年委員による落ち葉掃きを実施したり、ボランティア委員は「緑の羽根募金」を行い、苗や肥料を購入するのに役立てたりした。また、園芸委員による季節ごとの学校花壇の手入れも年間を通して行った。



3 考察

各教科や道徳・特別活動などで、生徒には多方面からの環境問題に関するアプローチがなされている。そのつど生徒は真剣に考え、取り組んできた。しかし、その学習や活動ごとに終わってしまい、環境問題を根本から考えさせるまでには至っていないのが現状である。現在では環境問題を地球全体の問題としてとらえられることが多くなってきた。つまり一人一人の小さな取組が地球全体に影響を与えることを認識することが重要になってきたわけである。本校の環境教育でも、この「小さな実践の積み重ね」を重視するためには、まず教師自身が環境問題に対する意識を高め、日常生活の中から中学生としてできることは何かを考えさせ、小さいことから実践していく態度を育てることを推進させなければならない。

4 課題

本校の周辺は主に住宅地であり、自然に親しむのは難しい環境である。その中で地球環境を意識させるのは難しいかもしれないが、直接体験ばかりが環境教育でなはい。生徒個人個人が環境に対する意識を広い視野で常にもち続けるためには、視聴覚教材を効果的に使ったり、自宅での取組にも問題意識をもたせるようなはたらきかけをしたり、さまざまな角度から指導する必要がある。

また、教師全体の環境問題に対する意識を高めるために、研修会を設けたり、各教科の授業だけでなく、学校全体の取組を計画したりすることも今後の課題である。教師の自覚の高まりは、あらゆる場面で必ずや生徒に反映するに違いない。